

K 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。
HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
	0	0	●	0	0

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

指示語は、それ以外の普通のことばとキワダった対照をなしている。例えば、犬ということばは、それを言うとき何かしら特定のしぐさや体の動きを示さなくては駄目だというような条件はまったくついていない。他のいかなることばについても同様で、だからこそ暗闇でも、また相手の姿が見えないときでも、音声だけ聞えればそれで充分なのである。

ところが指示語は、音声だけでは不十分で、必ず指さすしぐさが同時に組み合わせられなくてはいけない種類のことばであるから、これは人間の⁽¹⁾ことばとしては例外的な存在ということになる。

指示語そのものの話に入る前に、そもそも指示、つまり私たちが「それ」「これ」などと言って、指で何かをさし示す指示行為とは、一体どのようなものかを考えてみる必要がある。

ある人Aが誰かBに向かって、「これ」と言いながら何かCを指さすときに、一体どのようなことが起こっているのかを、段階的に分析してみよう。

まずAが発した「これ」という音声によって、⁽²⁾Bの注意がAの方に向けられる。ところがAは腕を少し体から離して指(普通は人さし指)を突き出している。そこでBの注意はこの指に向けられる。しかし面白いことに、⁽³⁾Bの注意はこの指それ自体に止まることをせず、すぐに指を離れて指の前方に移動してゆき、Cに到達する。

このように分解すると、やや不自然に聞え、私たちは誰かに「これ」と言われたとき、こんな面倒なことなどやっていない、すぐCの方を見るのではといった疑問を抱く方もあると思う。

しかし、もしAの姿が見えないとしたら、あるいはちようど運悪くAの腕や手のあたりが何かの蔭になって見えないようなときは、たとえAの言う「これ」をちゃんと聞いた人でも、Aが何を「これ」と言ったのが分らず困惑するに違いないことを考えると、少なくとも a にはこのようなしくみになっていることが納得されるところと思う。

このように、指示語を耳にした人は、先ずことばを發した人を見て、次にその人の指そのものではなく、指が示す方向の先の方を見るといふ二段構えの反応をしていることを初めて [b] に明らかにしたのは、オックスフォード大学の著名な心理学者であつたH・H・プライスであつた。

プライスはその著書『思考と経験』の中で、一般に指示として知られている現象が、実はいま説明したような二つの要素の複合から成り立っていることを示し、このような性質をもつた指示を、方向的指示と名づけたのである。

そして驚いたことに、方向的指示の二番目の要素である「指を使って特定の方向を示す」ということは、必ずしもすべての指示行為に不可欠なものではなく、むしろ第一の要素、つまりある人の「ことばを發する行為それ自体が、聞く人の注意をひきつける」という要素こそが指示の本質であると考え、これを文脈的指示と呼んでゐる。つまりこの文脈的指示に方向の指示が付加されたものが、方向的指示だというわけである。

そこであまり耳慣れぬこの文脈的指示とは何かを、少し詳しく見てみよう。まず例をことば以外のものからとつて説明する。プライスの用いた例の一つに商店の看板の分析がある。昔イギリスでは文字の読めない人が多かつたこともあつて、何か品物を売る店では、店の前に見本として実物を置くことが見られた。しかしこれではいろいろ不便なこともあつて、多くの場合その品物の絵を板か金属板に描いたものを、入口の上から張り出した棒に吊しておいた。道を行く人々がこの看板を見て、それが例えば靴の絵であれば、その店が靴屋だと分るしくみである。

ところでこの看板の絵は、⁽²⁾純粹にただの靴の絵としてそこに描かれているわけではなく、いつてみれば「靴ここにあり」(Shoes here) という意味の働きをしてゐると考えられる。

このことを [c] に言うならば、先ず通行人の注意が看板の絵にひかれる。次にその注意は看板の絵から離れて、絵のまわりの空間に移動する。結果として絵に最も近いところにある店に注意がゆき、そして店の中に置いてある靴に注意は帰着するのである。

重要な点は、この靴の絵には特定の方向へと見る人の注意が向かうことを助ける方向性が含まれていないという点である。したがってひとまず絵にひきつけられた見る人の注意は、その絵のまわりを探索する形で移動し、結果として近い所にある靴にたどりつくことになる。だから看板の絵は実物に出来るだけ近いところに置かれる必要がある、あまり離れていては役に立たないのである。

ここで **d** に、私たちを取り巻く環境世界のどのような性質や状況が、特に私たちの注意をひくものかをあらためて考えてみると、たとえばあたりが静かなときに突然大きな音や声がするとか、緑一色の草原の中に鮮やかな赤や黄色の花が咲いていたり、青空に一羽のカモメが飛んでいるなど、心理学で言うところの《**図柄**と下地》の関係が存在する場合であることが分る。

そういえば、人混みの中で見つけた友人の注意をひきたいようなとき、私たちは手⁽³⁾を高く上げたり、白いハンケチを振ったり、大声を出したりして、周囲の環境から自分をきわだてようとする。このようなしぐさや行為は、みな下地としての背景から**図柄**が浮き立っているという意味で、文脈的な指示性をもっているため人の注意をひくのである。

このように考えてみると、言語の場合、文脈的指示性とは、ただ単に「これ」とか「あれ」のような指示語のみがもつ性質ではなくて、何かしらのことばを **e** な場面で発する行為すべてに、いわば自動的に**フズイ**しているものと言えることになる。

誰かが「犬！」と叫べば、まわりの人は一瞬そのことばにひかれて発話者の方を見る。ただしこの発話行為には方向性が含まれていないから、それを聞いた人は犬と言った人のまわりを見回し、犬の姿を探すことになる。

ところが「これ」や「あれ」の場合には、この《**図柄**と下地》の関係にもとづく文脈的指示に加えて、指さし行為が付加されているために、ことばを聞いた人の注意（視線）はこの指の方向をたどりながら、それが示す線の延長へと流れてゆく。この部分が方向的指示なのである。

（鈴木孝夫『教養としての言語学』による）

(注) 図柄と下地——何かを背景としてもものを見る場合、見えるものを図柄といい、背景を下地という。

問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 空欄 [a] [e] には、それぞれどのような言葉を補つたらよいか。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてはならない。

- 1 学問的
- 2 一般的
- 3 記号論的
- 4 具体的
- 5 論理的

(C) 線部(1)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。

- 1 体の動きを示すと同時に「それ」「これ」などと言うから。
- 2 言葉がさし示す対象が常に距離感を伴うものだから。
- 3 音声にしぐさが組み合わされることによって用をなすから。
- 4 目の前に具体的な対象が存在しないと意味をもたないから。
- 5 指さし行為をしながら音声を発しなければならぬから。

(D) 線部(2)について。なぜ、純粋にただの靴の絵としてそこに描かれているわけではないのか。左記各項から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 近くに靴があることを示しており、方向的な指示性を持っているから。
- 2 看板の絵と同じような靴が店内に置かれていることを示しているから。
- 3 靴の絵から靴屋だと分かるので、店にも通行人にも便利だから。
- 4 通行人の注意を喚起して、実物の靴の存在を示す役割を持っているから。
- 5 店頭で靴そのものを置くことの不合理性を回避することができるから。

(E) ……線部(甲)・(乙)について。それぞれ本文中のどの類の「指示」に該当するか。左記各項の中から最も適当なものをつつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

- 1 文脈的指示
- 2 方向的指示
- 3 方向の指示

(F) ———線部(3)について。筆者は、本文の趣旨との関わりの中で、この行為をどのように整理しているか。それが最も端的にあらわれている十五字以上二十字以内の一続きの部分を本文中から探し出し、初めの三字と終りの三字を記せ。ただし、句読点は含まない。

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 方向的指示とは、身体の一部を使って特定の方向を示すことである。

ロ 指示行為は、文脈的指示と方向の指示の双方を含んでいる。

ハ 《図柄と下地》の関係は、文脈的指示と方向的指示の關係に対応している。

ニ 文脈的指示には、ことばを発するという行為が不可欠である。

ホ 方向的指示と文脈的指示との違いは、指さし行為によって区別できる。

二 左の文章を読んで後の問題に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

ある時、中村光夫氏(注)が、日本における評論家という立場、評論の受けとられ方を嘆いていたが、筆者もまったく同感である。作品自体について論じているのに、ちよつとほめると、「あいつはオレに好感をもっている」ととられ、ちよつとけなすと、「あいつはケシカラン奴だ」とくる。作品をとびこえて、人対パーソナル人の直接の感情的出来事になつてしまう。はつきりいうと、知らない人のもの、自分の反対に立つ人のものに対しては、悪評をするが、知人や仲間、特に先輩のものに対しては、必ずといっていいくらいほめてゐる。そして、往々にして(筆者などもついそうなつてしまうのだが)、本当に作品の弱点をついたのちに起こる、いまわしい、パーソナルな感情攻撃をされることを考えると、ついおざなりのことを書いて a しまいたくなるのである。あるいは初めから依頼を断わるしか方法がない。結局、損をするのは第三者である読者であり、これは大きな社会的マイナスである。書評の信頼度が非常に低いことである。

こうしたわづらわしさは、何も書評などという特殊の領域に限られていたのではなく、私たちが、毎日の生活で経験するものである。人のことをいつたり、ある事件に、ある問題に関して、私たちが自分の意見を発表するとき、対人関係、特に相手に与える感情的影響を考慮に入れないで発言することは、なかなかむずかしい。

もちろん、いずれの社会においても、こうした考慮は多かれ少なかれあるわけであるが、日本社会におけるほど、極端に論理が無視され、感情が横行している日常生活はないように思われる。その証拠に、日本人の会話には、スタイルとして弁証法的発展がない。「ほめる書評」と「けなす書評」しかないように、「こもつともで」というお説頂戴式の、一方交通のものか、反対のための反対式の、平行線をたどり、ぐるぐるまわりして、結局はじめと同じところにいるという、いずれかの場合が圧倒的に多い。

普通の会話でも、こうした傾向が強いのであるから、会議となると、ますますこの傾向が強くて、何のための会議であるのかわからなくなつてしまう場合も多い。この日本人の習性が最も大きくあらわれるのは、学会や

研究会である。若い学者が先輩の学者に対して堂々と反論できないことである。

こうした場合の、学会での反論の仕方をみると、まず、不必要なサンジ(注1)(それも最大限の敬語を羅列した)に長い時間を費やし、そのあとで、ほんのちよつぱり、自分の反論を、いかにもとるにたらないような印象を与える表現によってつけ加えたりする。客観的にみると、学者にあつても真理の追求より、人間関係のリチュアル(注2)のほうが優先している、といわざるをえない。私は、西欧においても、アジアにおいても、これほど不合理な学者間のやりとりを見たことがない。日本人の学問に対する「なまぬるさ」「少なくとも社会的行動において」が、ここにも見られるような気がする。いかにも、実力よりも肩書きの優先する学者の世界のあり方であろう。

何らかの意味において「タテ」につながる人々のなかでは、反論はこのように抑圧されているから、大つぴらな反論というものは、つねにそうした関係にない人々(他の集団に属する人々)、あるいは反抗者(たとえば、上司に反発を感じて発言をする部下や、教師に何らかの不満を抱く若い学生など)から出される。この場合も、反論とは称しても、実は論理の上での反論というよりは感情攻撃の形をとりやすい点で、やはり論理性の欠如がみられる。この典型的な例は、国会における、与党に対する野党の反論である。

このように相反する、または異なる主張・考えをもつ者が話し合つたり、議論をしたりすると、自分たちの主張を叫ぶばかりで、両者のあいだに論理的な **b** が無いのが普通である。こうしてみていると、日本の学界においても、文芸・評論の世界においても、真の論争は存在しがたく、非難(censure)はあつても真の批評(criticism)は存在しがたいものと考察できる。

批評にとつて、感情は敵となる。感情はエネルギーを結集することができても、個別的であり、またパースペクティブを欠くために、共通の場に立つ者、また同じムードをもつ者にしか通じないという、批評において決定的な弱点をもつものである。

文芸批評というような特殊な分野でなく、論争が行なわれ、どちらかが、ゆずらなければ事が運ばないような場合、一方の主張がとおり、一方が譲歩する原因は、論争のテーマ自体でなく、他の社会的強制による場合が圧

倒的に多い。したがって、譲歩した側には、いつも感情的欲求不満が残りやすく、また、これは第三者にとつては、不可解な決着が少なくない。論理による勝敗の決着にみられる、あのサバサバした気持ちには遠く及ばない。日本人の「話せる」とか「話ができる」という場合は、気が合っているか、一方が自分をある程度犠牲にして、相手に共鳴、あるいは同情をもつことが前提となる。すなわち、感情的合流を前提として、はじめて話ができるのであるから、お互いに相手について一定の感情的理解をもっていなければならない。したがって、初めて会った人とか、知らない人とかとは、日本人は実に会話が下手であり、つまらない内容のことしか喋ることができないという弱点をもっている。

反対に、たいへんよく知っている、そして気が合った仲間の間では、最も会話を楽しむことができる。このような感情的合流がみごとにできるので、断片的に言葉を発するだけでも通ずるし、話題を何の前ぶれもなく、急にかえても大した支障は来たさない。もちろん、敬語を使いわけらわすらわしさからも自由になり、何を喋っても誤解されたり、不都合なことが起こらないという安心感がある(よし、その仲間に「タテ」の関係があるうとも、そうした席ではいちおうブレイコウが許されうる)。

日本のお喋りの楽しさは、実にこうした条件において最高である。お互いの気分のおもむくままに話は流れ、非論理的であるから、内容は当然(インテリの場合でも)知的なものではないかもしれないが、これは一種のリラクセーションとして、大いに社会生活上貢献している、といえよう。こんな無防備な会話⁽¹⁾というものは、少なくとも外国のインテリの間では存在しないといてもよいかもしれない。

日本人は、論理よりも感情を好み、論理よりも感情をことのほか愛するのである。少なくとも、社会生活において、日本人はインテリを含めて、西欧やインドの人々がするような、日常生活において、論理のゲームを無限に楽しむという習慣をもっていない。論理は、本や講義のなかにあり、研究室にあり、弁護士の仕事のなかにあるのであって、サロンや喫茶室や、食卓や酒席には存在しない。そうしたところでは、論理をだせば理屈っぽい話としてさげられ、理屈っぽい人は遠ざけられる。

ノーベル賞を受賞された朝永博士(注3)がいつかこんなことを書いていらした。

——外国の物理学者は、食事をしている時でも、酒を飲んでいられる時でも、すぐ物理のディスカッションを始め、紙と鉛筆を出して式を書き、まるで何か憑かれた人(a)という感じで、こちらはとてもついていけない、と。

私も外国生活になれない頃は、彼らが食事中にも、団樂(b)のサロンでも、たいへん頭脳を使う話をするので、閉口したことがある。また反対に、日本にきた外国のインテリは、日本人がお酒を飲みだすと、手のとどかない遠い所に行ってしまう、と取り残される寂しさを味わうのである。ある中国人は、日本人のこの姿を見るにつけ、あのように無防備で楽しむことのできる日本人は羨ましい、といった。あるアメリカ人は、日本の実業家がアメリカの実業家同様忙しいにもかかわらず、ハート・アタック(注4)で亡くなる率がずっと少ないのは、馬鹿話のできる酒席の時間というものをもっている故にちがいないと考えている。

論理のない世界に遊ぶ——しかもそれがきわめて容易に日常生活の場で行なわれ、それが公的な関係に交錯するほど、社会生活全体のリズムのなかに、その重要な（潜在的とはいえ）部分として位置づけられている——ということとは外国人にとっては一つの芸当とみえるかもしれない。日本人にとっては、それは序列のきびしい生活における神経の疲れを癒すという重要な精神衛生に貢献しているにちがいない。しかし、この論理のない世界というものを、そして、それを社会生活のなかで、これほど機能させるといふことを、そうした慣習を共有しない人たちに説明することは実にむずかしい。

日本人、日本の社会、日本の文化というものが、外国人に理解できにくい性質をもち、国際性がないのは、実は、こうしたところ——論理より感情が優先し、それが重要な社会的機能をもっているといふこと——にその原因があるのではなからうかと思われる。

（中根千枝『タテ社会の人間関係』による）

(注) 1 中村光夫——文芸評論家(一九二一—一九八八)。

2 リチュアル——儀式、しきたり。

3 朝永博士——朝永振一郎(一九〇六—一九七九)。一九六五年にノーベル物理学賞を受賞した物理学者。

4 ハート・アタック——心臓発作。

問

(A) 〓 線部(i)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書かいしよで記すこと)

(B) 〓 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 空欄 [a] にはどのような表現を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 褒めそやして

2 顔色をうかがって

3 お茶をにごして

4 念には念を入れて

5 煙に巻いて

(D) 空欄 [b] にはどのような語句を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 葛藤

2 発展

3 対立

4 根拠

5 決着

(E) ——— 線部(1)について。左記各項のうち、「無防備な会話」の説明としてふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 変なふうに誤解される心配のない会話

ロ 相手を傷つけない当たり障りのない会話

ハ 少しくらい失礼でも許される会話

ニ 包み隠さず秘密をさらけ出す会話

ホ 身構えずにリラックスできる会話

(F) ——— 線部(2)について。左記各項のうち、「社会的機能」の具体的な現れとしてふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 親しい間柄の飲み会において肩肘張らない会話が盛り上がること

ロ 非論理的な会話によって日頃のストレスが解消されること

ハ 理屈では許されない行為が感情によって許される場合があること

ニ 日常的に議論のゲームを楽しむことができること

ホ 無防備な会話によって知らない人とも仲良くなれること

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 日本人は論理よりも感情を愛しているので、会話を楽しむ文化を持たない。

ロ 日本社会においては、個人の業績よりも集団としての成果が尊重される傾向がある。

ハ 日本人は、気の合う仲間とは話ができるが、初対面の人と接するのは苦手である。

ニ 外国人は、日本人同士の会話に入っていけないと感じることがある。

ホ 日常生活において論理を極端に無視する日本人の日常生活は改善されるべきである。

三 左の文章は、日本に渡ってきた唐の王族を父として日本で生まれた娘が、父とともに唐に渡つて后となつた場面の一節である。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

この后、五つまでは母宮にそひたてまつりたまへりければ、その御ありさま、世の常の子どもよりもおとなしくおはして、よくおぼえたまふまゝに、「今は」とて出で離れにしに、母宮の抱きて、「今日こそ限りの別れなれば、世になくなりなむほどをも知りたまはじ。今日を限りとおぼせ」と、いみじう泣きたまひにし面影を心にかけて、やうやうおよすげたまふまゝに、「母宮いかになりたまひにけむ」と、東の山ぎはをながめつつ、この世の中あらまほしうもおぼされず、もののみあはれに心細くおぼされけるに、もしきのうちに誘はれ入りて、「鳥とならば」と夜昼ちぎり仰せらるるも、心につきて、あはれにめでたきこととおぼされけるに、かかる世の乱れどもに、いとど世の中いみじく心細くて、御子の御ありさまの、世になくうつくしくおとなしくおはしますに、よろづをばなぐさめて、いみじくおもしろき河陽縣にうちながめて、昼は法華經を讀みたてまつり、月のあかき夜は、琴を弾きつつあかしくらしたまふ。憂へ、世の常の人ならば深かるべけれども、もとよりもしきのうちあらまほしからず、限りなき御ちぎり、かしようもおぼされで、ただ母君のゆくへも知らず、逢ひ見るべきもなきなげきをしたまひし御身なれば、いとおもしろき所に起き臥しやすく、月をも花をも見つすぐしたまふは、心やすくおぼさるる、かつは世づかぬ御心とおぼし知らる。母宮の御ありさまに似て、もてなしありさま、ものうちのたまへるけはひ、日本の人にはいささかもたがはず。たをやかになつかしう、やはらかになまめきたまへるありさま、この国の人には似ざりければ、さぶらふ人も、宮の御ありさまに似つたをやかなれば、ありし菊の花の夕べも、我が世の人にたがはず申納言もおぼえたまふなりければ、風のつてにも、日本の人は聞かまほしうおぼされて、聖の渡りたりしにも、いみじうのたまひおぼししに、また申納言のかく渡ると聞きたまひしより、あはれにゆかしくおぼされしに、御子もなかなか、我が世の人にはものとはよくおはするを、この人をば常に見まほしく、なつかしきことにもむつびさせたまへば、しげくまありたまふを、立ちでて御覽するたびごとに、一心にか

かりてゆゆしくおぼつかなく思ふかたの人ぞかし」と、あはれに涙ぐましくおぼさるる御心の通ふにや、中納言も菊の夕べはおもかげ離れず、「また見たてまつらばや」と、嘆かしきまで思ひわたりたまふ。

〔浜松中納言物語〕による

(注) 1 およすげたまふ——ご成長なさるの意。

2 御子——この物語では、后が唐の帝との間にもうけた子は、中納言の父親の生まれ変わりとして設定されている。

3 河陽県——現在の中国河南省にある地。詩人の潘岳（二四八―三〇〇）が知事であった時に町中に桃の木を植えたと言われ、花に満ちあふれた地とされる。この物語では、后の父親が隠遁している所として描かれている。

問

(A) 線部の現代語訳を三字以内で記せ。

(B) 線部(1)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。

- 1 世を捨てて尼になったこともご存じないでしょう。
 - 2 世間から軽く見られることもご存じないでしょう。
 - 3 私が死んでしまったとしてもご存じないでしょう。
 - 4 家門が時勢に合わなくなることもご存じないでしょう。
 - 5 比類のない身分になる運命だともご存じないでしょう。
- (C) 線部(2)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。
- 1 何歳におなりになったのだろうか。 2 なぜお亡くなりになったのだろうか。
 - 3 どれほどお嘆きになったのだろうか。 4 どうしてお別れになったのだろうか。
 - 5 どのようにおなりになったのだろうか。

(D) 線部(3)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。

- 1 今の生活が申し分ないともお思いにならず
- 2 この世に生き長らえたいともお思いにならず
- 3 今の身分が好ましいものともお思いにならず
- 4 夫婦仲をよりよくしようともお思いにならず
- 5 今の世の中を望ましいものともお思いにならず

(E) 線部(4)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。

- 1 畏れ多い
- 2 運がよい
- 3 情け深い
- 4 尊ぶべきだ
- 5 並外れている

(F) 線部(5)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。

- 1 世間並みでない御愛情
- 2 世間なれしない御性質
- 3 世俗からかけ離れた御分別
- 4 時の権勢になびかない御意志
- 5 俗世にはふさわしくない御気性

(G) 線部(6)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。

- 1 家族とは離ればなれでいらつしやるのに
- 2 妻となるべき人には冷淡でいらつしやるのに
- 3 世間の人とは何となく違つていらつしやるので
- 4 自国の人にはよそよそしくていらつしやるのに
- 5 自分とは気が合わないと思つていらつしやるので

(H) 線部(7)の「この人」とは誰か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 后
- 2 中納言
- 3 御子
- 4 聖
- 5 母宮

(I) 線部(8)の部分について。「心にかかりてゆめしくおぼつかなく思ふかた」とは何を指しているか。本文中から最も適当な語句を抜き出し、三字以内で答えよ。

(J) 線部(9)について。誰に「また見たてまつらばや」と言っているのか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 后
- 2 中納言
- 3 御子
- 4 聖
- 5 母宮

(K) 線部(イ)・(ニ)はそれぞれ誰の動作・行為か。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてもよい。

- 1 后
- 2 中納言
- 3 御子
- 4 聖
- 5 母宮
- 6 さぶらふ人

(L) 線部(a)・(b)の文法上の意味は何か。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

- 1 推量
- 2 意志
- 3 義務
- 4 当然
- 5 可能
- 6 適当